

中国政治研究

——多種多様なアプローチの模索——

佐々木智弘

中国政治研究、それを日本に限定してもすべてを把握することは筆者の手に余る作業である。そのため、ここでは筆者の関心対象である中国共産党の一方支配体制に関連する単著になった研究を手がかりに、研究の傾向や課題をみていきたい。

●「分断化した権威主義」モデルの呪縛

中国政治は、毛沢東時代が終わり、鄧小平が改革・開放政策を提唱し進めたことで、大きく変化したととらえられている。中国共産党による一方支配体制という権威主義的な体制は、毛沢東時代は党中央から末端まで中央集権的なヒエラルキーが形成されているととらえられてきた。そして改革・開放政策の実施から約10年が経ったところで出てきたのが、リーバソールとオクセンバークの研究（参考文献①）とリーバソールとランプトンの研究（参考文献②）である。彼らが提唱したのが、「分断化した権威主義」（fragmented structure of authority）モデルだった。このモデルは、一方支配体制を中央から末端への集権的な組織形態になっていない、中央と地方、官庁、企業などのあいだに分断されているととらえた。そのため一方的なトップダウンによる支配ではなく、「協調」の重要性を指摘した。

改革・開放政策実施後の中国の経済発展の要因として、「放権譲利」、すなわち中央政府が有していた資源のコントロール権や企業管理権が地方政府や企業に委譲されたことで、共産党のコントロール力が弱体化したことがあるとの説明が有力である。この一方支配体制の変化を政治学的に説明するうえで「分断化した権威主義」モデルはインパクトがあった。

「分断化した権威主義」モデルは、研究対象が中央・地方関係、またエネルギー政策だけでなく、他の研究対象にも応用可能であるということで、多くの研究者

の共感を得て、現在に至っても先行研究レビューにおいて必ずと言っていいほどに取り上げられている。そして分析枠組みとして援用を試みる研究も少なくない。しかしそうした応用は必ずしも成功していない。それは、このモデルが決して万能なものではないため、研究対象によっては適合できないケースがあるからだろう。

今ではこのモデルの課題も指摘されている。メーサは指導部の権力分析に重点が置かれ、社会層など多様化したアクターの影響に無関心であった点を指摘した（参考文献③）。三宅は「協調」に対し「中央と地方が政策決定の前提となる合意形成のために相互の協力を必要としている」という意味に留まっていると指摘している（参考文献④）。

●一方支配体制の変化の分析

現在の中国政治研究は、「分断化した権威主義」モデルの呪縛を逃れ、一方支配体制をどのように捉えるかを模索しているといっていだろう。

1つのアプローチは、一方支配体制の変化を明らかにしようというものである。政治アクターの多様化のなかで、これまで研究対象にはならなかったアクターに焦点を当てている点に特徴がある。

加茂は法治が重視されるようになり注目されることになった人民代表大会に焦点を当て、共産党との関係である「領導・非領導」（指導する・指導される）の関係の変化を明らかにした（参考文献⑤）。鈴木は私営企業家などの新興の社会経済エリートに焦点を当て、共産党がこれらの台頭に適応し、取り込んでいることを明らかにした（参考文献⑥）。

●政治過程の分析

もう1つのアプローチは共産党の一方支配体制を所

与のものとし、政治過程を明らかにしようというものである。比較政治学の枠組みを使っている点に特徴がある。

三宅は、メゾレベルとしての省レベルを研究対象とし、ネットワーク論を使って、中央と地方の関係を説明した(参考文献④)。林は、党と軍の関係を合理的選択論で説明しようとした(参考文献⑦)。また外資政策をめぐる政治過程を分析した下野の研究もこのアプローチに含めることができるだろう(参考文献⑧)。

2つのアプローチは決して排他的な関係にあるのではなく、重複している部分も少なくない。しかしそれ故に後者のアプローチによる研究が、不本意にも前者のアプローチによる研究と同一視されてしまい、必ずしもアプローチそのものが評価されていない。

●多種多様なアプローチ

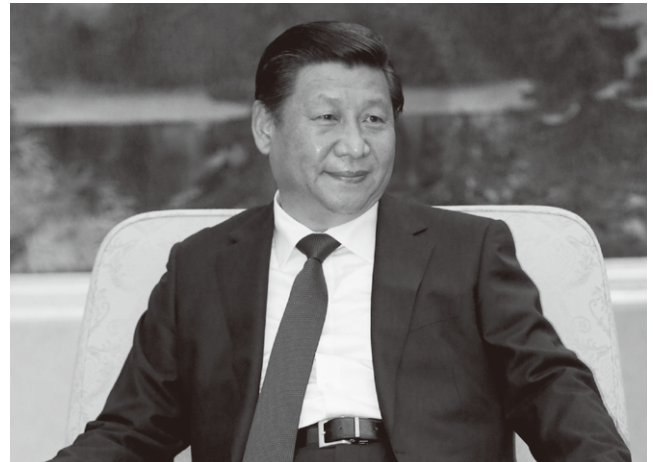
中国政治が高度経済成長下での「分配をめぐる政治」から低成長期を迎えての「削減をめぐる政治」へと変化し、今なお共産党を取り巻く状況が変化しているなかで、アクターはさらに多様化し、政治過程もさらに複雑になっている。そのため、個々の党の部門や中央官庁、軍などこれまで研究対象となっていないアクターは少なくない。そして共産党が手続き上の最終的な決定権を有していることが必ずしも実質的な影響力を有していることを意味しないように、共産党の役割を特定することも難しくなっている。また、政治過程の分析も経緯を叙述することに重きが置かれ、相互作用や協調のメカニズムについて詳細な分析はまだ緒についたばかりである。

非常に速い現実の変化を嘆くよりも、それに適応し中国共産党による一党支配体制をよりよく捉えるためには、中国政治研究は「中国共産党」研究だけではなく、広い意味での「中国政治」研究を目指そうということでもあるだろう。そのためには理論的な枠組みやモデルを提示することもよいが、まだ十分でないミクロ分析や事例分析を蓄積すること、そして多種多様なアプローチに精通し、寛容であることが必要であろう。

(ささき のりひろ／防衛大学校准教授)

《参考文献》

① Lieberthal, Kenneth and Michel Oksenberg, *Policy*



習近平国家主席 (提供: flicker)

Making in China: Leaders, Structures, and Processes, Princeton: Princeton University Press, 1988.

- ② Lieberthal, Kenneth and David M. Lampton eds., *Bureaucracy, Politics, and Decision Making in Post-Mao China*, Berkeley: University of California Press, 1992.
- ③ Mertha, Andrew, "Fragmented Authoritarianism 2.0": Political Pluralization in the Chinese Policy Process," *The China Quarterly*, No. 200, Dec. 2009, pp. 995-1012.
- ④ 三宅康之『中国・改革開放の政治経済学』ミネルヴァ書房、2007年。
- ⑤ 加茂具樹『現代中国政治と人民代表大会——人代の機能改革と「領導・被領導」関係の変化——』慶應義塾大学出版会、2006年。
- ⑥ 鈴木隆『中国共産党の支配と権力——党と新興の社会経済エリート——』慶應義塾大学出版会、2012年。
- ⑦ 林載桓『人民解放軍と中国政治——文化大革命から鄧小平へ——』名古屋大学出版会、2014年。
- ⑧ 下野寿子『中国外資導入の政治過程——対外開放のキーストーン——』法律文化社、2008年。